Q**＆**A**第７章の中から～第五の戒め**

**質問63** 第五の戒めは、何ですか。

**答えⅠ** 第五の戒めは、**「あなたの父と母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる」です。**

**質問64** 第五の戒めでは、何が求められていますか。

**答えⅠ** 第五の戒めは、目上の人、見下の人、あるいは対等の人として、さまざまな立場と関係において、すべての人に伴う名誉を守り、「その人に対する」義務を果たすことを求めています**。**

**１．「あなたの父母を敬え」との第五の戒めで「父母」はだれを意味しますか。**

　第五の戒めでの「父母」とは、私たちの母と父は勿論で、歳にあって私たちより年長者を含めていて、神が立てた器官でである家庭、教会、市民政府で権威の立場にある人々を意味します。家庭での父母たちは子供を教え、彼らが神の義務を果たすように指導する立場にいることで神が権威を与えました。神は教会を秩序あるようにさせ、権威ある者たちを立てて真理を保たせ聖を維持するようにされました。市民政府のやはり、神の公儀を施行するために神からの権威をいただきました。第五の戒めは神が権威を与えている者たちに従順と尊敬をしなさいということです。

1. **第四の戒めは 儀式法にも含まれていますが、過越祭のような祝祭と**

**同じ儀式法ではありませんか。**

　第四の戒めは、旧約の儀式法と関連されています。最も旧約には、過越際、七週の祭りような祝祭があります。しかし、第四の戒めは、神が創造なさった後、ご自身守られたことであり、儀式法が与えられる以前からあった道徳法です。勿論、第四の戒めが儀式法と関連されていると言っても、道徳法という性格のゆえに永続性を持っているのです。なぜなら、キリストが安息日を主日と変更なさったからです。もし、安息日が儀式法なら、キリストの十字架の死以降に廃止されたことでしょう。従って、新約において、主日は無視して、祝祭のような日を守るなら、キリストの贖いの恵みを無視することです（ガラテヤ4:10；コロサイ2:16—17）。キリストが十字架で死なれたことにより、旧約の儀式などは、それ以降において有効にならなくなったからです。

**質問58** 第四の戒めでは、何が求められていますか。

**答えⅠ** 第四の戒めは、神がご自分のみことばにおいて定めておられる一定の時、すなわち、七日のうち丸一日を、ご自身に対する聖なる安息日となるように、神に対して聖く守ることを求めています。

1. **神が 礼拝の日を定められた理由は、何ですか。**

　神は、ご自身に捧げられる礼拝のため、特定な日を定められました。神は、礼拝の日を人間たちの思いに任せませんでした。神が直接、礼拝の日を定められたのは、神の主権を現すことであり、私たちが礼拝を捧げる時、神に屈服しなければならないことを意味します。神は、私たちが持っている時間と日などに対して主権を持っておられることを現します。そのため、人々の便利を優先して礼拝の日を決められないのです。最も、すべての人は、神に礼拝しなければならないだけではなく、神が定められた日に礼拝すべきなのです。なぜなら、第四の戒めは創造の時の戒めであるので、すべての人類に適用されるからです。しかし、アダムの堕落以降、人々は神を求めて礼拝することもせず、神に礼拝する日を自分たちのために使用しますが、それは、戒めを破ることなのです。

**２．神が 安息日を聖別せよと、仰せられた理由は 何ですか。**

　神は、その日を、ご自身に捧げる礼拝の日として区別されたからです。勿論、ほかの日にも、神に礼拝することはできます。しかし、安息日については、ほかの日と区別して、その日には必ず礼拝するようになさったのです。神は、ご自身の民たちが、その日に礼拝するのを喜ばれ（ヨハネ20:19、24）、特に、その日に恵みを施すことを喜ばれます（ヨハネ21:15—18）。それゆえ、安息日を区別させて神に捧げるべきです。その日は神に礼拝することで、神の栄光を現すべきです。この日を聖く守るとは、特に、神を知らない人たちの前で、神の栄光を現すことなのです。

**質問59** 神は、七日のうちのどの日を、安息日と定められましたか。

**答えⅠ** 神は、世の初めからキリストの復活までは、週のうち 第七日目を安息日と定めました。復活の以降から 世の終わりまでは、週のうち 第一日目を安息日と定められました。これが、キリスト者の安息日です。

**１．創造の時に、安息日はどのように 制定されましたか。**

　神は、六日の間ですべての万物を造られることを完成させ、第七日目を安息日と制定なさいました。それは、神の創造が完全に完成されたことを意味します。七日のうちの第七日目が安息日として、キリストの復活直前まで持続されましたが、安息日には、神の創造とイスラエルの民がエジプトから贖われたことを記憶させ、神に礼拝することを命じました。モーセを通して、神が儀式法を与えられた時に、安息日の戒めと儀式法とは相互連結されています。しかし、イエス・キリストが十字架で死なれたことで、儀式法は、それ以上有効でなくなりましたが、その時、安息日の戒めがなくなったわけではありません。キリストは、安息日を、七日のうちの第一日目に移させ、安息日の意味は継続されています（使徒20:7）。

**２．キリストが復活の後、安息日を主日に変えられた理由は、何ですか。**

　創造以来、キリストが復活する以前までは安息日が守られて来ました。キリストが復活された以降、安息日が主日に変更されますが、それはキリストが安息日の主人だからです（マルコ2:28）。キリストは、週のうちの第一日目に復活されますが（マルコ16:9）、その日は、キリストの贖いの栄光による御業が完成されたことを証明する日です（ロマ1:4）。そして、その日は、キリストがすべての労苦から安息に入られた日です（へブル4:10；ルカ24:26）。キリストは神として、その日に礼拝を受けられます。それで、この日を「主日」と呼ぶのです。キリストが、ご自分の栄光と礼拝のために、聖なる日として区別なさったからです。初代教会のキリスト者たちは主日を守り（黙1:10）、その日を「キリスト者の安息日」と呼んだりもしました。

**質問60** 安息日を、聖別された日として守る方法は、何ですか。

**答えⅠ** 安息日を、聖別された日として守る方法は、ほかの日においては合法的である、この世的な働きと娯楽から離れ、その日丸一日を聖く休むことです。また、やむを得ない働きと慈善の働きに用いられる時間を除いて、すべての時間を公的礼拝と私的礼拝とに費やすことによって 聖別された安息日を守ることができます。

1. **安息日を 聖別する日とする方法について、聖く休むとは 何を語ってい**

**ますか。**

　安息日を聖く過ごすとは、神に区別して捧げるということです。安息日を聖別させるためには、聖い休みが必要です。聖く休むとは、世的なことや娯楽を休むことです。世的なことと娯楽などは、ほかの日には合法的ですが、安息日にしてはなりません。安息日には、肉体的な労働も休まなければならならず、世的に利得を得るための事業も休まなければならないのです（ネヘミヤ13:15—23）。このような仕事をも休む理由は、心が世的なことで一杯になり、騒がしい状態では、神への全き礼拝にならないので、肉的なことを抑制させ、罪を犯さないようにするためです。

**２．新約の主日も、旧約の安息日のように 守らなければならないのですか。**

　新約のキリスト者たちも、旧約のユダヤ人たちと同じように、厳格にキリスト者の安息日である、主日を守らなければなりません。それは、変わらない道徳的規定だからです。安息日の規定には、食べ物の準備のための労働も禁じています。安息日に火を炊くのも禁じています（出16:23、35:3）。安息日にはマナを集めに行くのも禁じられました。このような肉体的な労働が、飲食のためであったとしても禁じられたことは、新約において推論を適用できます。新約でも、食べて生きる問題による、肉体的な労働が主日に許可されませんでした。これは、神の民が、世と富に対する思い煩いによって神を忘れないようにするためです。安息日は、肉体的労働を休みながら、私たちにすべての物を供給してくださる神に委ね、委託する日なのです。

**３．安息日（主日）は、祝祭の日として喜ぶべき日ですが、**

**わざわざ娯楽を禁じる理由がありますか。**

　安息日（主日）が、祝祭の日であることに間違いありません。ところが、肉的性質の祝祭ではなく、霊的性質の祝祭です。それゆえ、私たちの霊的に必要なすべてを供給して頂きながら、霊的に新たにする日なのです。主日には、霊的でありながら天上的な対話で、霊魂を新しくする日です（ルカ14:1—25）。肉的な娯楽は、肉的な性向を最も煽り立て、霊的礼拝を妨害させます。さらに主日は、このように霊魂を新たにさせて、霊魂に必要なすべてを供給させて、残りの六日間を霊的に生きなければならないので重要です。しかし、主日までも世的で、肉体的なことに嵌っているなら、週の間の生活が霊的になり得ないのです。

**４．安息日（主日）に実行すべき聖い義務には、どのようなものがありますか。**

　キリスト者は、安息日（主日）に、公的礼拝と家庭礼拝に参加すべきです。公的礼拝は、神のみことばの説教を聞き（ロマ10:17）、会衆と共に祈り、賛美を捧げることです（ルカ24:53）。そして、聖礼典に参与すべきです（使徒20:7）。勿論、キリスト者たちは公の礼拝後に家庭で礼拝すべきですが、家庭礼拝とは、家族が集まって聖書を読み（申6:7）、教理問答を勉強し、聖書と教理について話し合い（レビ記23:3）、神に祈り（エレミヤ10:25）、神を賛美することです。家庭礼拝は毎日の義務ですが、特に主日は、家長が導き捧げるのです。聖書でも、アブラハムが家庭礼拝を捧げ（創18:19）、ヨシュアも捧げ（ヨシュア24:15）、ダビデも捧げました（Ⅱサムエル6:20）。

1. **安息日（主日）に、公的礼拝と家庭礼拝と共に、私的礼拝を、**

**どのように捧げますか。**

　キリスト者は、公的礼拝と家庭礼拝と共に、個人的な礼拝も捧げなければなりません。個人的礼拝は、密かな祈りと聖書を読むことと信仰書を読み、黙想しながら自己点検をすることです。個人的礼拝では、自分の霊的状態を調べながら、自分の霊的性向を元気づけることが重要です（黙1:10）。安息日に、個人的礼拝を通して、神の恵みの豊かさを確認し、自分の霊魂を聖霊の感化によって力づけることです。このような恵みの手段を通して、神は恵みを豊かに与えると約束しておられるからです（ルカ4:31—32）。

**６．安息日（主日）を、色々な礼拝を通して 聖別させる理由は、何ですか。**

　儀式法が与えられた時、安息日には、常供の全焼のいけにえ以外にも、穀物のささげ物と注ぎのささげ物とを捧げるようになっていました（民28:9-10）。安息日には、毎日捧げる礼拝の二倍になります。このように、終日神に礼拝を捧げることによって、安息日（主日）を完全に捧げられるのです。安息日（主日）を、神に礼拝することで完全に用いることによって、神の栄光を現し、自分自身には罪を抑制させ、世的にならないようにするためです。

**７．安息日（主日）に 許可されていることは、何ですか。**

　安息日（主日）に、やむを得ず許可されたことは、慈悲を施すことと、遅くなれば命の危険がある場合です。慈悲の働きとは、私たちの体を適切に新たにすることと（ルカ6:1）、病人を見舞い、彼らの治療のためにすべきことを含めます（ルカ13:16）。危険に冒されている人の生命を保たせるための働きと、貧しい者たちのための救済も含めます（Ⅰコリント16:2）。一方で、予測できなかった事件が起きて、手遅れになれば危険になる場合も、主日に許可されていることです。敵が侵攻して来て避難しなければならない場合と、火災が発生して火を消さなければならない場合、台風が来て船を縛らなければならない場合も該当します。

**８．安息日（主日）戒めでは、家庭の家長と主人に**

**特別に指示している理由は、何ですか。**

　家庭での家長は、家族の責任者であり、主人としもべの間では、主人はしもべを治め、導く責任があります。安息日（主日）の戒めは、彼らに特別な勧告と責任を要求しています。家長には、家の家族たちが安息日（主日）を聖別して守るように指導する責任があって、主人には、しもべたちが安息日（主日）を汚さないようにする責任があります。勿論、これは、国家の指導者にもつけ加えられた責任です（ネヘミヤ13:21）。家長と主人と指導者たちには、安息日（主日）を聖別して守る見本を見せるべき責任がありますが（ネヘミヤ13:17）、それは、神がお立てになった家庭と社会と国家が神の主権を認め、神を礼拝すべきであることを記憶させるためです。それゆえ、第四の戒めは、「安息日を心に留め」覚えなさいという文句によって始まります。

**質問61** 第四の戒めでは、何が禁じられていますか。

**答えⅠ** 第四の戒めは、求められている義務を怠ったり、いい加減に果たすことと、怠情や、それ自体が罪深いことを行うことにより、あるいは この世の業務や娯楽についての不必要な思い、ことば、行いによって、この日を汚すことを禁じています。

**１．第四の戒めが 禁じている規定の中で、義務を行わないことについて**

**どのように語っていますか。**

　第四の戒めは、安息日を守ることに付随する義務を無視して、実行しないことを禁じています。安息日に遂行すべき義務に注意を払わず、無視することは、週の間にも信仰的義務を遂行しないという証拠です。彼らは、無神論者と神聖冒涜者と背教者のように生きて行く者たちです。安息日に関して規定している信仰的義務に注意を払わないことは、形式的な宗教生活をしているという証拠です（マタイ15:8）。例えば、信仰的義務を部分的に遂行する場合とは、公的礼拝には参加するものの、その後の生活は、娯楽と世的なことに没頭することであり、義務を無視することです。

**２．信仰的義務を遂行することに 形式的な状態とは、どういうことですか。**

　安息日（主日）に、体は礼拝に参加するのですが、その心に恵みの原理が植えられなくて、形式的にだけ守る場合があります。このような場合は、礼拝に参加したとしても、色々な考えをして、心は混沌の状態にいて、時には居眠りや、疲れた姿を見せます。その心が世的なもので一杯になっていて（アモス8:5）、神のみことばの説教が聞こえて来ませんし、祈りを捧げる時もほかの考えをしていて、会衆が賛美する時には唇だけを動かします。それは、神のみことばを軽蔑する態度であり、偉大なる神の臨在の前で罪を犯していることです。

**３．安息日（主日）に 怠ける行いとは、どのようなものがありますか。**

　安息日に怠ける行為は、その日を汚す行為です。安息日（主日）に徘徊する行為がここに当てはまり、昼寝をするとか、あるいは、礼拝に積極的な態度を持たないことです。安息日（主日）に信仰的義務を怠る者たちは、この日に主が約束なさった霊的有益を得られないだけではなく、その日を汚すことによって罪を犯しています。安息日（主日）には、より積極的に神に礼拝を捧げ、自分の霊的有益のために教理を学び、聖書と主題に対する論議に参加すべきです。このようなことを疎かにすれば、自然に体は怠けるしかないのです。

**４．安息日（主日）を 汚す行為には、どのようなものがありますか。**

　安息日（主日）には、敬虔な対話をするのが義務です。しかし、不必要な考えをしていて、敬虔でない世的な対話をするのは、安息日（主日）を汚す行いです。勿論、世的なことをし、肉的な娯楽を行うのは、安息日（主日）を汚す行為ですが、このようなことは、聖なる性質とは反対のことです（イザヤ58:13）。従って、安息日（主日）を始める時から祈りによって始め、一日を終える時にも、自分のことばと行動を顧みるべきです。最も安息日（主日）は、主にあって、喜びと楽しみを得る日なので（イザヤ58:14）ことばと行動には霊的注意を払わなければなりません。

**質問62** 第四の戒めに つけ加えられた論証は、何ですか。

**答えⅠ** 第四の戒めに つけ加えられた論証は、神が私たち自身の業務のために 一週の内六日間を与えておられること、週七日の中で 一日については、特別な所有権を主張しておられること、神ご自身が模範を見せられ、安息日を祝福しておられたことです。

**１．第四の戒めに つけ加えられた論証の、第一は何ですか。**

　神は、私たちに仕事ができるように週のうち六日を許可しておられます。六日は私たちに業務ができるように許可なさったことについて、感謝しなければなりません。私たち自身のために働けるようにしてくださった神の寛大さを認めるべきです。そのため、安息日（主日）を感謝することによって、神に完全に捧げなさいということです。安息日（主日）だけは、私たちの日ではなく、主の日として、当然、神に礼拝を捧げるべきです。特に、この日は、神の豊かさを記憶すべき日なのです。

**２．第四の戒めに つけ加えられた論証の、第二は何ですか。**

　第四の戒めにつけ加えられた第二の論証は、安息日（主日）が主の所有であることです。主は、この日をご自身の所有と仰せながら、この日にご自分と交わりができることを約束をなさったのです（イザヤ58:14）。主の民は、この日を通して主と交わりをする特権を味わえます。この日に、神の恵みを味わい、喜ぶことです（Ⅰコリント13:12）。最もこの日は、主の日であるので、私たちの個人的な目的で使用することはできないのです。この日に、個人的な行事をするなり、自分の個人的な目的を成し遂げるために、この日を使用してはなりません。この日を個人の用度で使用するのは、主の日を盗むことです。

**３．第四の戒めに つけ加えられた論証の、第三は何ですか。**

第四の戒めにつけ加えられた第三の論証は、主がこの日を守られることを、ご自分が自ら見本を見せてくださったことです。主が直接、見本を見せてくださったのは、道徳的性質による私たちの義務です。神が直接、安息日を聖であるとされて休まれたからです。神が私たちに、直接、見本を見せてくださった通り、私たちがこの日を守らなければなりません。

**４．第四の戒めに つけ加えられた論証の、第四は何ですか。**

第四の戒めにつけ加えられた第四の論証は、主が安息日を祝福されたことです。神は、この日を聖なる用度として使用するように区別させただけではなく、この日を、聖く守る者を祝福なさると宣言なさいました。神が、安息日（主日）を良く順守する者には、ご自分の摂理の中で祝福なさると命じられました。しかし、反対に、この日を聖なる日として守れず、汚した者にはすべての悲惨が臨まれると告げられました（ネヘミヤ13:18）。安息日を聖く守る者にとって、この日は、さらに豊かな恵みの交わりの中で幸せな日です（イザヤ58:14）。従って、私たちは創造と贖いを見上げながら、この日を聖なる日として守るべきなのです。